

点が3つあって、初めてそこに図形が生まれるよう

1や2では完結してしまう物事が、3になって初めて広がりを持つ、  
ということがあります。

三角形は図形の最小単位であり、形が発生するその始まりといえますが記号論においても3という数字はとても重要な意味を持っています。

ベースの記号論では、記号は「表象」「解釈項」「対象」の3つの関係によって生成していくとされていますが、これは作品制作のプロセスにとてもよく似ていると感じています。

作品制作では、学生は自分のこれまでの学びや経験と向き合う中で、それぞれのテーマやモチーフと出会い、定着と試行錯誤を繰り返す中で、表現が生まれていきます。

そうして生まれた作品達は、展示されたたくさんの人の目に触れることで無限の解釈や刺激を生み、新たな表現の起点となっていく——この一連のプロセスの中で、学生は作品制作を通じた社会との関わりを学び「卒業制作展」とは、それが改めて社会に向かって開かれるものだと思います。

今回のポスターでは、そんな根源的な形である 3 と無限の広がりを持つ 3 の両方をテーマにしました。

繰り返しながら広がっていく三角形は、無限の「解釈の広がり」を表現しています。文字は映り込み、鏡のように反射しながら、少しづつ色を変化させていきます。その様は、まるで万華鏡のように、内側の実体を外に向かって反射させることでそこに固有の表現を浮かび上がらせる、表現という行為そのものを象徴するものでもあります。

色彩はアルタミラの洞窟画のような、土や顔料の色をイメージしており、自然から採取できる色を通して、より原始的な表現への欲求や芸術の始まりの起点、のようなイメージを表現しています。

